
“灰の上の眠り” / “EL I” ~

——不気味な影と声の揺らぎの向こう

Mousikè 編集室 (Art-Phil)

一閃の強烈なピアノの連打音から放たれる音響の霧に、解体された音列が舞う。ヴィオラとチェロからなる和音はその音列を反射させ、光の鏡面をつくりだす。弦楽器の和音構成の変化とともに、鏡面は褶曲し、その背後に潜む不気味な影の存在を暗示する。「灰の上の眠り V」では、堆積した灰のうえを風は静かに吹き、音響のプリズムは凝集と拡散の間で留まることになる。



「EL I」においては、チェロによる EL のモチーフが呼吸のように反復される。ヴィオラによる長い持続音の後、沈黙が訪れる。その微睡のような凧の状態において、影の静謐はかたちを変えながら緩やかに遷移していく。ヴァイオリンによる繊細な持続音は、音響空間にアウラの気配を纏わせる。弦楽器群からそれぞれのリズムで紡ぎだされるモチーフの反復は遠近感を失いながら、ただそこに残像している。

「灰の上の眠り VI」では、強度を増した弦楽器群による和声の鏡面の向こうで、ピアノのクラスターが光のカーテンを織りなす。音響のプリズムは内破し、その光をとめどなく溢れさせる。圧倒的な輝きのなかで、影のかたちは流動化し、砂紋のような不確かさとともに散逸する。

その後、東京周辺での原子力発電所の事故を仮想的に描いた「灰色の町」や被爆した科学者に寄せた「他人の顔」のテーマソング、「The Lamia」、「Just a Stateless Wanderer」などが、ギターとブズーキの伴奏で歌われた。ピアノや弦楽器群の硬質な響きのなかで、熱を帯びた声は灰色の退廃を語る。その言葉は蜃気楼のように揺らぎ、“世界の終末”への薄暗い影を予感させる。

「EXPOSE 死の灰」展では、東日本大震災による福島原子力発電所の炉心融溶と放射能汚染という事件に、ビキニ環礁での水爆実験による第五福竜丸をめぐる歴史的な記録が接続された。ある切迫感のただなかで、不気味な影と声の揺らぎに耳を澄ませること。■

“C'est là la cendre: ce qui garde pour ne plus même garder, voulant le reste à la dissipation, et ce n'est plus personne disparue laissant la cendre, seulement son nom mais illisible.”

J. Derrida / Feu la cendre

「EXPOSE 死の灰」展 (2011年4月29日・KEN [東京都世田谷区])

① * 灰の上の眠り V, ② * EL I, ③ * 灰の上の眠り VI,

④ ** 灰色の町, 他人の顔, The Lamia, Just a Stateless Wanderer

亀井庸州 (Vn), 安田貴裕 (Va), 多井智紀 (Vc), 石川星太郎 (Pf),

* 木下正道 (Comp), ** Ayu (Comp, Arr, Gt, Bz)